



特定医療法人社団

# 鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス  
<http://www.hovukai.org/>

発行：2012年11月15日  
発行責任者：  
特定医療法人社団 鵬友会  
事務局長 池島 守



## 経験を“絆”にかえて

横浜ほうゆう病院 事務部長 前沢 恒一

先日、市民向け医療・福祉講座「認知症の薬について」を開催致しました。当日はご家族の方、施設の方など80名を超える方々にご参加して頂き、大盛況のうちに終了することができました。ご多忙中にも関わらずご参加して頂いた皆さまには、改めてお礼申し上げます。

鵬友会主催の市民講座で当院が担当するのはこれで7回目となりましたが、今回一つの試みとして、会場を昨年までの旭区民文化センターサンハートから、当院に併設しているデイケアサンアリスに変更しました。集客規模から言えば、およそ三分の一程度と小さくなりましたが、参加者の方とより身近に意見を交わすことができ、アットホームな雰囲気の中、とても良い会になったと思っております。

このデイケアサンアリスは、昨年7月に横浜ほうゆう病院から移設して一年、決して交通の便が良い所ではありませんが、利用者の皆さまには、緑に囲まれた素晴らしい環境の中、認知症ケアに富んだプログラムを織り交ぜ、毎日楽しく充実した生活を送って頂いております。また、介護保険ではなく、医療保険の適用であることもこの施設の特徴ですので、興味のある方は是非一度ご相談下さい。

事務部長の性でしょうか、ついデイケアのPRに熱が入ってしまいましたが、話を戻します。今回の市民講座は認知症の薬がテーマということで、先に出た認知症新薬の概要やその違い、また副作用時の対応などについて発表させて頂きました。内容については裏面をご参照下さい。従来の認知症治療にお

いて、薬といえば限られたものしかありませんでしたが、今回の3種類の新薬登場や、身近型認知症疾患医療センターの整備など、認知症治療の在り方がどんどん様変わりしています。また世間では、京都大学山中教授が開発したiPS細胞がノーベル医学・生理学賞を受賞し、大きなニュースとなりました。まさに医療の世界は日進月歩です。

しかし、いくら良い薬や治療法が開発されても、それを扱う我々医療に携わる人の質が良くなければ意味がありません。当院では病院の質、職員の質の向上への取り組みの一環として、病院機能評価の取得を決めました。現在は、来月に迫った受審へ向け準備の真っ最中ですが、既存の規定やマニュアル、病院の設備などを一から見直すと、今まで見えていなかった問題がこんなにも多く存在していたのだと気付かされます。そして、それらの問題のほとんどは一人では解決できません。それぞれの関連部署が連携して問題解決に臨むことが必要となります。

病院機能評価の取得は病院にとって名誉なことではありますが、大切なのはこの過程です。病院全体の問題を職員全員で共有し、一つひとつ解決していく…。大変な作業ではありますが、職員同士で助け合い支え合いながら、乗り越えていきたいと思っております。

年頭、池島常務理事が今年のテーマに「絆」を掲げました。今年もあと一ヶ月半、この病院機能評価受審を職員全体の絆を深めるチャンスに転換させ、一歩先を行く認知症専門病院としてこれからも職員一同努力を続けていきたいと思っております。

# 第19回 市民向け医療・福祉講座 開催！

～横浜ほうゆう病院 デイケア サンアリスにて～

平成24年10月20日（土）16時より市民講座を開催しました。今回のテーマは『認知症の薬について』。横浜ほうゆう病院の職員がそれぞれの立場から、薬の概要や服薬方法などについて講演を行いました。当日は、認知症患者の家族の方や施設関係者など、約80名の方にご参加頂きました。



【会場風景】

## ◆基調講演「認知症の薬物療法」◆



【日野 院長】

日野院長は講演の冒頭「薬物療法だけではなく、リハビリ（非薬物療法）、ケアの3つが揃わないと上手くいかない」と認知症治療の考え方について述べ、新薬を含めたアルツハイマー型認知症の中核症状に適應する4種類の薬の特徴について説明。また、BPSD（認知症の行動・心理症状）に対する介入の原則として「第一選択は非薬物療法であることを認識してもらいたい」と強調し、薬物療法を行う際の、初期の多量使用や多剤併用を避けるといった注意点と保険適用外であること、副作用の影響などの問題点を指摘し「認知症の患者さんを診て20年になるが、どの薬を使用するか、どのタイミングでいくかということは今だに悩みます」と認知症治療の難しさを述べました。

## ◆継続服用の重要性◆



【小山 薬局長】

小山薬局長は「認知症は徐々に進行していく病気。その進行をできるだけゆっくりさせることがお薬のねらいです」と述べ、継続して薬を服用していくことの重要性を示した上で「薬は家族や介護者がしっかりと管理して下さい」と参加者へ呼び掛けました。また、4種類のアルツハイマー型治療薬を取り上げ、作用機序や剤形などの違いを紹介した後、飲み忘れた時に注意すべき点や副作用への対応方法を述べました。

## ◆信頼関係は必要不可欠◆

加藤科長は与薬方法について、拒否が激しい患者への対応として、キーパーソンの名を借りて服薬を促したり、時には引いて無理強いしないといった過去の事例を紹介し「服薬という行為から患者さんは安心感を得ているのだと思う」として信頼関係の必要性を述べ、「一番身近にいる家族や介護者は、服薬後の変化を見逃さず、患者の代弁者として客観的に伝えていくことも大切なこと」と介護者が持つ役割について強調しました。



【加藤 科長】

## ◆会場からの声◆

後半の質疑応答では、グループホームでの服薬事情や現在処方されている薬への疑問点、更には、意欲低下や帰宅願望、暴力といった認知症の諸症状に対する相談など、多くのご意見を頂くことができました。その話の内容から、患者や患者を支える方々の置かれている状況や心情がうかがえ、改めて認知症介護の厳しさ、難しさを痛感しました。この様な会が皆様の情報共有の場となり、負担や不安を少しでも軽減できればと思っています。